



日本植物分類学会

ニュースレター

No. 8

Feb. 2003

目 次

年頭のあいさつ.....	2
新評議員あいさつ.....	3
日本植物分類学会2003-2004年度役員等の構成.....	4
第2回日本植物分類学会賞受賞者の決定.....	5
諸報告	
IAPTシンポジウム2004の準備状況.....	6
国際植物命名規約邦訳委員会2002年度の活動報告.....	7
絶滅危惧植物専門第一委員会活動報告.....	8
植物データベース専門委員会報告.....	9
日本分類学会連合第二回総会報告.....	10
自然史学会連合総会報告.....	10
2002年度関西地区講演会の報告.....	13
2002年度第2回メール評議員会議事抄録.....	14
お知らせ	
総会における審議事項について.....	15
評議員会開催のお知らせ.....	16
2003年度野外研修会のお知らせ.....	16
2002年度事業報告(案).....	17
2003年度事業計画(案).....	18
2002年度決算報告(案).....	19
2003年度予算(案).....	20
日本植物分類学会第二回大会公開シンポジウムのお知らせ.....	21
会費納入と自動振替利用のお願い.....	21
金沢大学理学部標本庫(KANA)移転のお知らせ.....	22
教官(助教授)の公募について.....	22
連絡員からときどき便り	
北方草木便り・4・.....	23
チイ便り・1・.....	25
・瓦屋山調査行・.....	26
会員消息.....	28

年頭のあいさつ

会長 加藤雅啓

年が改まってもう1ヶ月以上がたちました。会員の皆様には植物分類のさまざまな分野でご活躍のことと存じます。新生・日本植物分類学会が設立されてこの5月で丸2年を迎えます。学会活動、運営も落ち着きを取り戻しつつあると感じています。喜ばしいことにこの間、会員数が増加し、現在850名を突破しています。増加の一因は、隔月誌「プラント」(研成社)が本学会を宣伝して下さっているからです。研成社ならびに、宣伝に財政援助下さっている岩槻邦男氏にこの場を借りてお礼申し上げます。さらなる拡大を目指し、当面は1000名を目標にして、地道な積み上げを図っていく所存です。そのためには、学会が魅力的であることが肝要であることはいうまでもありません。日常的な活動に加えて、「面白い」企画が望まれるでしょう。

反面、学会統合の移行時の会費納入手続きに少しチグハグなところがあったこともあり、かなりの会員の方が未納の状況です。このままでは学会の運営に支障をきたす恐れがありますので、該当される会員は納入下さるようお願い申し上げます。また、会費納入を自動振込にさせていただくと、会計処理が簡略になって大変助かりますので、ご協力をお願いいたします。

本学会誌として発行している英文誌、和文誌、ニュースレターの出来映えはいかがお感じでしょうか。個人的には質量とも上がっていると思います。投稿原稿も増えていると聞いていますが、なお一層会員各位のご協力をお願いしたいところです。学会誌等の発行の他に、野外研修会、関西で講演会なども開いています。第2回学会賞も決定しました(別掲)。

絶滅危惧植物についての委員会も引き続いて活発に活動し、レッドデータブックの改訂を目指し、移入生物の問題も検討に入ります。植物データベースは分類学にとってますます重要な武器になっていますが、GBIF(地球規模生物多様性情報機構)日本分類学会連合等と連帯して、より一層活動を強めます。また、本学会は植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合、日本分類学会連合(昨年の総会で加盟決定)に加盟して、関連する学協会と連携し、さらに環境省等と協力して、生物多様性保全、データベース作成といった一学会をこえる課題に取り組んでいます。本学会と国際植物分類学連合(IAPT)等が共催する国際シンポジウムが来年(2004)に迫りました。今年は本格的な準備作業に入ります。

第2回大会が3月に神戸大学で開かれます。会員の方々が大勢参加されて盛り上がるようお願いしています。学会でお会いできるのを楽しみにしています。

新評議員あいさつ

評議員 角野康郎

新しい日本植物分類学会の役員も二期目に入り、私をはじめ計12名で今期の評議員を務めさせていただくことになりました。職責を果たせるように努力致しますので、皆様のご意見やご叱責を大いに寄せていただきたいと思います。

新しい学会も第一期の役員や会員の皆様のご尽力で、まずは順調な滑り出しを果たしました。しかし、まだ多くの課題を抱えていることも事実です。新しい解析手法がどんどんと進歩して、今まで考えられなかったような研究が分類学者のテーマになることは歓迎すべきことです。一方で、日本の植物相や分布の解明という地道な研究、とくに在野のアマチュアやセミプロというべき方々の努力に依存する部分の重要性を忘れてはいけなないと、私自身は考えています。

専門家の研究は、次々と「流行」を変えながら進歩していきます。これは研究の進展の帰結として当然のことでしょう。しかし、先ほど挙げた地道な基礎研究の将来は決して楽観視できない状況にあることに、あらためて目を向けたいと思います。大学などの研究機関では、そのような研究は特定の個人の奮闘を別にすればますます隅に追いやられているのが時代の流れです。在野でも若い人が次々と育っているかということ、決してそうではありません。失礼な言い方をお許しいただければ高齢化が進む一方です。

私は、学部や大学院で分類学を専攻する若い人たちの中に、広い視野を持ち、在野の研究者と交流し、その中から学ぶ人たちがもっとふえることを期待しています。研究材料の採集を頼むときだけでなく、日常的に自らも日本の植物相に関する見識を深めようとする意欲をもった元気な若者が増えて欲しいと望んでいるのです。分類学会の野外研修会はそのような役割を果たす場としても重要でしょうが、各地で日常的な交流が行われるようになれば日本の分類学の裾野がさらに広がるでしょう。専門の研究者にならずとも、若手の活躍する場は広がっていますし、学会もそれを支える努力をするべきでしょう。

また分類学者に対する社会的要請も、今後、高まる一方でしょう。当分類学会には絶滅危惧種に関する専門委員会があります。近く移入種の問題も扱うようになるかと聞き及んでいます。これら絶滅危惧種と移入種の問題は、地球上の生物多様性を脅かす重大問題であり、分類学会が社会的責任を果たすことのできる重要な分野です。限られた数の分類学者のもとにいろいろな問題が持ち込まれたのでは研究にならないという、ぼやきも聞こえてきます。分類学会会員の中にも多様な意見や立場を取る人がいるのは当然ですが、学会全体として社会に背を向けるような雰囲気を作ることは好ましくありません。

私自身は水草という、分類学的には研究が遅れ、また絶滅危惧種が集中する植物群として社会的にも注目を集めているグループを研究対象としているために、このようなことに思いが向いてしまうのかも知れません。

評議員挨拶の主旨からはずれたかも知れませんが、こういう評議員もいるということで、最近感じることを述べさせていただきました。

日本植物分類学会 2003-2004 年度役員等の構成

庶務幹事 遊川知久

今期の役員等が下記のように決まりましたので報告いたします。

会長 加藤雅啓

庶務幹事 遊川知久

会計幹事 横山潤

編集委員長 岡田博

ニュースレター担当幹事 西田佐知子

ホームページ担当幹事 藤井紀行

図書幹事 布施静香

植物分類学関連学会連絡会担当幹事 綿野泰行

日本分類学会連合担当幹事 綿野泰行

自然史学会連合担当委員 西田治文

講演会担当委員 福岡誠行

評議員

秋山弘之、伊藤元己、今市涼子、角野康郎、北川尚史、高橋英樹、田村実、
永益英敏、西田治文、原田浩、堀口健雄、邑田仁

監事 栗林実、高橋弘

編集委員

秋山弘之（和文誌編集責任者）、伊藤元己、角野康郎、瀬戸口浩彰、高橋正道、
高宮正之、永益英敏、西田治文、野崎久義、原田浩、村上哲明、邑田仁

Editorial Board

David E. Boufford、Madjit I. Hakki、De-Yuang Hong、Jae-Hong Pak、Ching-I Peng

ニュースレター連絡員

石田健一郎、大村嘉人、落合雪野、古木達郎、松本定、三島美佐子、山下純、
米倉浩司

絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会

井上健（委員長）、小川誠、勝山輝男、加藤辰己、角野康郎、川窪伸光、
芹沢俊介、高橋英樹、藤井伸二、矢原徹一、横田昌嗣、米倉浩司

絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会

柏谷博之（委員長）、井上正鉄、岩月善之助、神田啓史、千原光雄、出川洋介、土居祥兌、中西稔、服部力、吹春俊光、古木達郎、渡辺信

植物データベース専門委員会

伊藤元己（委員長）、加藤英寿、川井浩史、永益英敏、山口富美夫、米倉浩司

IAPT シンポジウム 2004 準備委員会

岩槻邦男（委員長）、秋山弘之、加藤雅啓、田村実、辻誠一郎、永益英敏、野崎久義、村上哲明、邑田仁、綿野泰行

学会賞選考委員会

角野康郎（委員長）、今市涼子、北川尚史、永益英敏、邑田仁

国際植物命名規約邦訳委員会

大橋広好（委員長）、岡田元、黒沢高秀、中井秀樹、永益英敏、根本智行、野崎久義、邑田仁、米倉浩司

第2回日本植物分類学会賞受賞者の決定

2002年度学会賞選考委員会委員長 永益英敏

日本植物分類学会ニュースレター第6号（平成14年8月発行）で募集いたしました第2回学会賞には、4名の方の推薦がありました。学会賞選考委員会における審議の結果を会長に報告し、下記のように受賞者を決定いたしました。

白岩卓巳 氏（神戸親和女子大学講師）

堀田 満 氏（鹿児島県立短期大学学長）

白岩会員は兵庫県の植物、とくにシダ植物を中心に調査・研究を重ねられました。六甲山のブナ林や兵庫県のウマノスズクサ属など地域の植物に関する研究報告や、神戸と植物分類学の関わりについてのさまざまな著作を通じて植物分類学の普及に貢献し、兵庫県の植物研究の発展に大きく寄与されたことが評価されました。

堀田会員は東南アジア・太平洋地域の熱帯域を広く調査し、分類学・生態学・有用植物学の分野で数多くの研究業績をあげ、たくさんの図鑑類や教科書の執筆により、植物分類学の普及に努められました。また環境問題や絶滅危惧種の保護にも積極的に取り組みました。鹿児島大学の植物標本庫の整備にも尽力されるなど、さまざまな分野での広範な活躍が評価されました。

諸報告

IAPT シンポジウム 2004 の準備状況

準備委員会幹事 加藤雅啓

この件についてはニュースレターNo. 1,5にごく簡単に触れられているだけです、現在の状況をお知らせします。

2001年3月、国際植物分類学連合 (International Association of Plant Taxonomists, IAPT) の Tod Stuessy 幹事長から、本シンポジウムを日本で開催する可能性について本学会に打診があった。2001年にウィーンで「Deep Morphology」に関して、2002年にライデンで「Plant Species-level Systematics」に関してという具合に、毎年世界各地で IAPT のシンポジウムが開かれるようになった。その一環として2004年に主としてアジアの研究者が参加する本シンポジウムが企画され、その開催が本学会評議員会で承認された。以下はシンポジウムの概要 (予定) である。

名称：アジアの植物の多様性と分類学に関する国際シンポジウム

主催：日本植物分類学会、国立歴史民俗博物館、国際植物分類学連合、種生物学会、日本藻類学会

後援：日本分類学会連合

時期：2004 (平成 16) 年 7 月 29 日 (木) - 8 月 1 日 (日)

会場：国立歴史民俗博物館 (千葉県佐倉市城内町 117)

参加費：2 万円

1. シンポジウム

セッション 1 系統地理学：生物地理への分子的アプローチ

セッション 2 アジアの植物の多様性と植物相研究

セッション 3 アジアの植物の分子系統

セッション 4 植物分類学における情報学

セッション 5 さまざまな植物群における種

セッション 6 海を渡った華花 (公開シンポジウム)

セッション 7 ポスター発表

2. エキスカーション 8月2日(月)房総半島

実行委員会は、準備委員会を主体として共催学会からの委員を加えて、独立させる予定である。また、開催資金は参加費の他、各団体などからの補助金、寄付金で調達する計画であり、会員各位のご理解とご協力をお願いしたい。連絡は準備委員会 (別掲) まで。なお、シンポジウムのホームページも近いうちに設置する予定である。

国際植物命名規約邦訳委員会 2002 年度の活動報告

委員長 大橋広好

生物学の中で学名の維持と管理は分類学者の責任分野となっています。植物の学名に関しては国際植物命名規約を原典とします。日本植物分類学会では将来にわたり国際植物命名規約翻訳のために邦訳委員会を発足させることとなり、2002年度第1回メール評議員会でその設立が認められました(ニュースレター No.6, 2002 Aug.)。今期の国際植物命名規約邦訳委員会は次のメンバーで構成されることになりました。大橋広好(委員長)、岡田元、黒沢高秀、中井英樹、永益英敏(副委員長)、根本智行、野崎久義、邑田仁、米倉浩司。

国際植物命名規約は1992年に「ベルリン規約」、1994年に「東京規約」が翻訳されています。2000年に出版された「セントルイス規約」はまだ日本語訳ができていません。国際植物命名規約は1906年の「ウィーン規約」に始まり「セントルイス規約」は改訂第13版に当たります。この間規約中のすべての規則が、全植物群に実際に適用されながら、実用と理論との両面から世界の植物学者によって検討され、国際植物学会議のたびに改正が重ねられてきました。この歴史を経て今日の命名規約は全体が一体をなす一つの法体系としてまとめられています。このため、個々の条文の理解にも全体の把握が基礎にあることが大切です。命名規約の全体的な理解のためには、日本語訳と原典とを併用して活用することが最も効果的な方法であると思われます。実際、全体の整合性に基づく単純ではない実例の示されている場合もあり、「東京規約」をある植物生理学者が「推理小説を読むような味がある」と評したことも理解できるように思います。

今期邦訳委員会の発足後、2002年9月11日東北大学大学院理学研究科附属植物園津田記念館で最初の打ち合わせを開きました。永益委員の仙台出張に合わせて、大橋、根本、米倉が出席でき、11:00-14:00にわたり、本委員会の基本的な役割について相談しました。

最初に、本委員会の基本を次のとおり確認しました。1. 国際植物命名規約(ICBN)の邦訳と出版を将来にわたって継続的に供給することを目的として、日本植物分類学会に国際植物命名規約邦訳委員会が設置されたこと。2. 今期の邦訳委員会は「セントルイス規約」の日本語版をつくること。3. 「セントルイス規約」の翻訳許可はIAPTから大橋委員長が承認を受けており、著作権使用料の支払いは免除されていること。但し「Appendix I. Names of Hybrid 以外の付則を翻訳に含めないこと」が翻訳許可条件であること。3の条件について補足すれば、邦訳に含めない付則は保存名と廃棄名の目録および学名不採用図書のリストです。これらは原典を参照すべき部分であると思います。

次に、「セントルイス規約」日本語版作成のために、今後の方針と進行について協議しました。要点は次の通りです。IAPTの翻訳許可条件を受け入れ、日本語版「セントルイス規約」は全委員が分担して翻訳する。Subject Indexは「東京規約」の事項索引を参照して作成する。日本語版は単行本として2003年5月末出版を目指す。日本語版はIAPTと同じ方式でホームページでも公開する。用語の統一について検討するため、東京規約の「植物命名法用語集」をメールで配布する。

この打ち合わせの議事録を全委員に報告、協議の結果委員会議事録として承認しました。さらに、この取り決めに従って各委員は翻訳作業を進め、各自分担部分の翻訳原稿を12月21日までに完成しました。この原稿を永益委員がまとめ、全委員にメールで送付しました。現在(2003年2月1日)は各委員がメール原稿を査読している段階に進んでいると思います。

なお、日本語版の出版費等に関しては3月の学会評議員会で審議される予定となっているそうです。また、今になって邦訳事業に予算措置をお願いしておくべきだったと気付きました。最終的なまとめは全委員が数日間、事業費で温泉に泊まって、集中的に原稿を検討すると当初から決めておきたかった。委員長の浅慮と反省しています。

絶滅危惧植物専門第一委員会活動報告

委員長 井上健

絶滅危惧植物専門第一委員会はこのたび社会的な要請を受け移入植物の問題も取り扱うことになり、今期の新委員会から絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会と改称することになりました。委員会のメンバーに変更はありません。移入植物の問題はこれから委員会として取り組んでいきたいと思いますが、今回の報告では前回の報告後の委員会としての活動を述べさせて頂きたいと思います。

委員会は分類学会大会前後と植物学会大会前後と年2回開催し、今年3月に予定している会合が第4回になります。委員会の現在の主要な中心議題は環境省とタイアップして行いつつあるレッドデータブックの改訂作業です。今年度は、来年度から2年間の予定の調査に備え、各県の主任調査員や調査員の依頼・調査種などの選定・調査方法などの検討・環境省との打ち合わせなど準備作業を行っています。特に11月に2回、46都道府県の主任調査員の方に集まって頂き、今回の調査の説明会を開催しました。主任調査員の方は分類学会の会員の方でない方も多いのですが、各県の植物相に詳しい方々です。フローラに関心のある会員の方は主任調査員または委員会に協力して頂けると幸いです。

前回の調査では離島部に調査員があまりいなかったため、データが抜け落ちた島がかなりあります。今回の調査ではデータの抜け落ちた地域のデータ収集も大きな目標の一つです。会員自身の研究目的で離島部に出かけることを予定しているようでしたら、絶滅危惧植物のデータ収集も視野に入れておいて下さい。予算があれば、旅費の一部を補助することも考えています。

前回の調査で俎上に上らなかった種類(原則として変種以上)の絶滅リスクの評価も主要目的の一つです。会員の発表した新種や現在忘れられている種の中で絶滅リスクを評価する必要のある種がありましたら、ご連絡下さい。3月の委員会の時に、最終的に調査対象種を決定する予定です。

第一委員会としては、レッドデータの改訂作業の他にもいくつか行っている仕事があります。そのひとつは「種の保存法」による植物種の指定作業への助言作業です。環境省が種指定をなるべく迅速に行えるように、種指定候補種の選定・各省との協議資料の作成などに助言を行っています。種指定すれば植物を保全できるというものではありません。

せんが、種指定により絶滅に歯止めがかかる可能性があれば、なるべく早く種指定するよう働きかけたいと思いますので、候補種の推薦・協議資料の作成などに会員の皆さんの協力を頂けたら幸いです。

また行政機関などの開発行為などにより、絶滅危惧植物の個体群が脅かされるような場合、問題の所在を連絡して頂ければ委員会として行政機関に善処を求める方向で働きかけたいと考えていますので連絡を頂ければと思います。また、現在シカの食害により、絶滅危惧植物の絶滅リスクが高まっていることが指摘されています。現在委員会としてシカの食害防止のための要望書を検討しています。島嶼におけるヤギの食害、移入植物による自生植物の衰退など類似の問題があると思いますが、これらは今後取り上げてゆきたいと考えています。

最後にIUCNや東アジア諸国など海外の機関や研究者との協同などの問題があります。前回のレッドデータブックはIUCNなど海外で高い評価を得ていますが、残念ながら日本語で書かれているため、詳細な点は理解できないと思います。日本の活動を海外に宣伝するのも大事な仕事だと考えています。これらすべての仕事をこなすのは困難ですが、ご協力頂けたら幸いです。

植物データベース専門委員会報告

委員長 伊藤元己

植物データベース専門委員会は旧日本植物分類学会の植物情報専門委員会を引継ぐ形で設立された委員会である。委員会の仕事として、おもに Flora of Japan (講談社サイエントフィック社刊行, <http://www.kspub.co.jp/>) の電子化を行いました。(財)花博協会、科学研究費補助金などの助成を受け、現在、I, IIc, IIIa, bの内容が公開されています(<http://foj.info>)。

加藤会長が再選され、新たなメンバーで活動することになりました。新委員会は、伊藤元己(東大, 委員長)、加藤英寿(都立大)、川井浩史(神戸大)、永益英敏(京大)、山口富美夫(広島大)、米倉浩司(東北大・植物園)の6名で構成されています。

本期は、タイプ標本の情報について重点的に活動していこうと考えています。言うまでもなく、タイプ標本は学名の基準となる標本で、標本電子化のプライオリティーが高いものです。国際的にもタイプ標本電子化のニーズは高く、特に自国の生物のタイプが他の国にある発展途上国は強く要望しています。現在、欧米を中心に、さまざまなタイプ標本電子化プロジェクトが進められていて、そのいくつかはすでにインターネットを通じて公開されています。日本としても国内に所蔵されているタイプ標本の電子化とインターネットを通じての公開を進めることが必要です。この電子化事業の達成にはさまざまな困難がありますが、最も大きなものは標本上にタイプ標本と明示されていないタイプの発掘だと思います。この問題解決には分類学の研究成果を待たなければなりません。植物データベース専門委員会では、その他、植物の情報について、さまざまな問題を検討していきたいと思います。会員の皆さまのご協力をお願いします。

日本分類学会連合第二回総会報告

担当幹事 綿野泰行

2003年1月11日(土)に日本分類学会連合の第二回総会が国立科学博物館新宿分館で開催されました。日本植物分類学会としては、正式に加盟して最初の総会にあたりません。昨年1月の設立以来、我々の学会を含めて6学会が新たに加盟し、現在では25学会、会員数一万人を軽く超える大きな組織になりました。

昨年の活動報告として、ホームページを立ち上げたこと(<http://www.bunrui.info>)、ニュースレターを2号発行したこと(ホームページでPDFを見れます)、日本産生物種数調査ワーキンググループの説明などがありました。日本産生物種数調査ワーキングというのは、昨年の設立シンポジウムの際の議論がきっかけとなって発足したもので、各生物群について記載段階の仕事の現状を知るため、既知種数と未知種数(手元に標本等のデータがあり新種であることが分かっているが記載がまだなもの)のデータベースを作るプロジェクトです。現在、委員会内でのテスト中で、今後ネット上で公開する予定だそうです。何種いるのかという問題が、一つのデータベースとして整理される訳で、教育上も価値が高いものになりそうです。

今年度の新たな活動目標として、加盟学会の一般会員向けのメーリングリストの新設の話題がありました。今まで連合の活動の内容を知るには、連合または加盟学会のホームページにアクセスする以外に方法が無かったものを、メーリングリストで対処しようという計画です。このメーリングリストが出来ましたら、このニュースレター等で参加方法をお知らせします。予算については、2004(4です)年度から各学会一万円の加盟費を徴収する案がだされました。現在40万円ほどの繰越金があるのですが、食いつぶすだけでなく、安定的に連合を維持するにはやはり加盟費が必要との説明がありました。

毎年、総会の後にはシンポジウムが開催されています。今回は、日本産生物種数調査ワーキングと関連して「日本の生物はどこまでわかっているか - 既知の生物と未知の生物」というものと「ヨーロッパが所蔵する日本産生物タイプ標本 - 日本の生物多様性研究発展の鍵」の2つのシンポジウムが行なわれました。来年のシンポの一つは“移入種”がテーマだそうです。ご期待下さい。

自然史学会連合総会報告

担当幹事 西田治文

12月27日に2002年度総会が開かれました。議事録、予算関連書類をご参照下さい。なお、自然史学会連合のホームページが改善されました。自然史関連エッセイや写真ギャラリーも新設されましたので、ご覧下さい。<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ujsnh/> 投稿も歓迎いたします。投稿ご希望の方は連合幹事の西田までおしらせください(nishida@mechgate.mech.chuo-u.ac.jp)。

2002 年度自然史学会連合総会議事録

日時：2002 年 12 月 7 日（土）10:00 - 11:30

会場：国立科学博物館新宿分館資料館 1 階会議室

運営委員会：森脇（代表）、伊藤（会計）、篠原（庶務）、西田、森田、溝口、野村、佐々木、遠藤

出席学協会（22 団体）：日本霊長類学会、日本地質学会、日本植物分類学会、（社）日本植物学会、種生物学会、動物分類学会、日本花粉学会、日本生態学会、地衣類研究会、日本地理学会、日本菌学会、日本動物行動学会、日本生物地理学会、（社）日本動物学会、日本古生物学会、日本貝類学会、日本蜘蛛学会、日本蘚苔類学会、日本昆虫分類学会、日本人類学会、日本遺伝学会、日本魚類学会（+ 委任状 8 で、3 分の 2 を超える 30 団体の参加が確認され総会が成立）

1. 森脇代表の挨拶後、友国氏（昆虫分類学会）を議長として選出
2. 報告事項
 - a) 14 年度連合活動の報告（篠原）：別紙（総会プログラム資料）を用いて説明
 - b) 連合ホームページ（西田・森田）：編集委員会の設置と内容の大幅改訂について
 - c) 地域教育アクションプラン（森田）：名称を「自然史教育展開プログラム」としたことおよび千葉県博において実施した理科教員対象の地学系の実習について
 - d) 地域博物館アクションプラン（森田）：「展示活動と研究活動」についての地域博物館対象に行った連合アンケートの結果の出版準備状況
3. 審議事項
 - a) 2001 年度決算報告および監査報告（伊藤・植村）：質疑応答後承認された。
 - b) 2002 年度会計経過報告（伊藤）：質疑応答後承認された。
 - c) 2003 年度予算案（伊藤）：関係委員から以下の補足説明を行い、質疑応答後承認された。
 - i. 共催シンポジウム（篠原）：科研費公開促進費が得られた翌年に限り主催シンポジウムの他に、学協会との共催シンポジウムを予算（上限 25 万円）付で実施する案について
 - ii. ホームページの更新（森田）：業者委託や編集諸経費について
 - d) 各種作業部会の設置（西田）：自然史教育プログラム、地域博物館アクションプランおよびホームページ編集委員会の活動を高める目的で、作業部会の設置の必要性について説明した。特に自然史教育展開プログラム・地域博物館アクションプランについては現場の会員の周りに組織を作って連合が支援する体制作りの必要性、人選については連合から指名（連合代表から囑託）および加盟学協会からの推薦も欲しい旨の説明がなされ、質疑応答後に設置が承認された。
 - e) ホームページの有効活用（森田）：編集委員会の活動内容説明の他、業者（モノリス・中村氏）から、デモをともなった連合ホームページの改良点や紙面の充実方法について説明がなされ、各学協会、運営委員会および中村氏の間で意見交換を行った。編集委員会からホームページ掲載用の原稿や写真（エッセイ、ギャラリーおよびコラム）への協力が呼びかけられた。編集に関わる要綱などは作業部会で検討する等各種の案について説明があり、承認された。
4. その他

1) 学協会からの報告

- a) 菌学会(小野氏)から出版助成費に関わる情報提供について各学協会へのお礼とその後の経過報告について報告がなされた
- b) 動物学会(永井氏)から特定欧文誌を持つ学協会への科研費の見直し状況について説明がなされ、詳細を知りたい団体には情報を提供する旨が連絡された

2) 来年度の予定

2003年度総会・シンポジウム(篠原): 時期は11月29日。総会では連合代表の選出、主催シンポジウムは「予測の自然史科学-未知と未来へのアプローチ-」を予定。

5. 追加のおしらせ

1) ホームページ編集委員会では、エッセイ、コラムへの原稿を募集しています。メールを通じてすでに連絡がいてありますが、一般の方に加盟学協会や連合の存在をアピールするためにも一層のご協力をお願いいたします。

2) 科研費の助成が当たった翌年に限り、予算(上限25万円)をともなった共催シンポジウムを企画することが総会で承認されました。予算は謝金や講演者の旅費等に自由に使用していただけるものです。下記期間に公募しますので、シンポジウムを検討中の加盟学協会に皆さんのご応募をお待ちします。なお1件のみの助成になります(応募複数の場合は運営委員会にて抽選で決定します)。予算だけではなく企画についても協力します。

募集期間: 2003年2月1日~3月31日まで(応募がない場合は締め切りを後ろにずらします)

対象シンポジウム: 2003年5月~12月までの間に開催予定のシンポジウム(各学協会の大会中に開催されるものでも結構です)。内容や規模に制限は設けません(学協会間の交流を促進するシンポジウムに助成できれば幸いです)。

応募方法: 締め切り当日までに別紙の内容を記入し、連合庶務(篠原)までメール、手紙、ファクスいずれかの方法でご連絡ください。

注意事項: 助成が決まった場合は、関連印刷物に「自然史学会連合との共催」等の一文を記していただきます。開催終了後に、会計書類(領収書など)をまとめた簡単な報告書の提出を義務づけます。

共催シンポジウム応募用紙

氏名:

連絡先(メールアドレス):

加盟学協会名:

シンポジウム名:

開催時期:

会場:

シンポジウム内容:

その他:

注) シンポジウム名、開催時期、会場は仮のものでも結構ですが、その場合は(仮)と記入ください。その他には講演者や講演タイトルなど決まっていたら、合わせてご連絡ください。連合へのご希望などもお知らせください。

2002 年度関西地区講演会の報告

担当委員 福岡誠行

今年度の講演会は2002年12月21日(土)に大阪市立大学文化交流センター(大阪市北区梅田1-2-2-600 大阪駅前第2ビル・6階)でもたれました。年が明けて1月に開くべきでしたが、分類学会の第2回大会が3月14, 14, 15日に神戸大学でおこなわれる予定でしたので、12月にもちました。

プログラムは以下のとおりです。

10:30 - 10:35 : 挨拶

10:35 - 11:25 : 布施静香(兵庫県立人と自然の博物館)

「ショウジョウバカマ属の分類と植物地理」

11:35 - 12:25 : 大井哲雄(東京大・院・理・植物園)

「アオキの倍数化を伴った地理的分化」

12:25 - 13:40 : 昼食

13:40 - 14:30 : 瀬尾明弘(京都大・院・理・植物)

「琉球列島の分子植物地理学」

14:40 - 15:30 : 織田二郎(大阪府立柏原東高等学校)

「ミヤマカンスゲ群の分類学的再検討」

15:40 - 16:30 : 高橋 晃(兵庫県立人と自然の博物館)

「中国西部の植物 ~ マオウ属をもとめて砂漠に行く ~ 」

布施静香、大井哲雄、瀬尾明弘の3氏はそれぞれ学位論文を取得したか、申請中か、申請予定の新進気鋭の学究たちです。DNA情報を取り入れた最新の手法で解析した成果を発表されました。織田二郎氏はオーソドックスな分類学の方法でこみいったミヤマカンスゲなどについて発表されました。高橋 晃氏は植物もろくに生えていない砂漠で、生薬のマオウ類を求めて、苦労したり楽しかったりしたことをスライドを使って講演していただきました。

なお、この講演会のお世話は大阪市立大学大学院理学研究科附属植物園の田村実氏にすべてお任せしました。

2002 年度第 2 回メール評議員会議事抄録

前庶務幹事 梶田忠

2002 年 12 月 16 日～26 日に 2002 年度第 2 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は当年度会計の決算案、次年度会計の予算案、当年度事業報告案・次年度事業計画案を評議員の方々に審議して頂き、次年度総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする、3月14日の評議員会と15日の総会に提案される議案には、その後3ヶ月の推移を考慮した最低限の修正が加えられている箇所がありますが、どうぞご了承ください。

開催日時：2002 年 12 月 16 日～26 日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

出欠確認

- ・加藤氏、村田氏は委任状出席。他評議員は全員出席。
- ・議長として永益英敏氏が選出された
- ・議事録署名人として邑田仁氏と伊藤元己氏が選出された。

審議事項

第 1 号議案 2002 年度決算案

第 2 号議案 2003 年度予算案

第 3 号議案 2002 年度事業報告案・2003 年度事業計画案

審議結果

以上、3つの議案は、承認数 11，非承認 0，白票 2 で全て承認された。

また、会費未納会員の問題、国際植物命名規約出版計画案、分類学マニュアル進行状況などについて協議された。

お知らせ

総会における審議事項について

庶務幹事 遊川知久

3月15日(土)に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いいたします。

(1) 2002年度事業報告案(17ページ参照)

(2) 2002年度決算報告案(19ページ参照)

(3) 2003年度事業計画案(18ページ参照)

(4) 2003年度予算案(20ページ参照)

(5) 命名規約(St. Louis Code)の出版について

国際植物命名規約邦訳委員会から答申があったように、2003年度中に命名規約(St. Louis Code)の邦訳を出版したい。

(6) 役員の再任に関する会則変更について

現行の会則では、幹事の任期は最長4年である。しかしながら編集委員長に関しては、雑誌の継続性を考えると4年以上務められるようにした方がよいと思われるため、会則の変更を提案する。

<現行>

第13条3 役員は、再任されることができる。ただし、引き続き4年を超えて同じ職に在任することはできない。

<変更案>

第13条3 役員は、再任されることができる。ただし、編集委員長を除いて、引き続き4年を超えて同じ職に在任することはできない。

附則 本会則は2003年3月15日より実施する。

(7) 会長選挙について

2002年3月の評議員会で、会長選挙に際しては、評議員会から若干名の候補者を推薦できるようにする方が、より効率的に選挙が行えるのではないかという提案があった。ただし、会長候補者は被推薦者に限らず、全会員に資格がある。この件については会則のうち、役員等の選出に関する細則の変更が必要になる。

<現行>

第2条 会長は、会員の選挙により選出する。

<変更案>

第2条 会長は、会員の選挙により選出する。評議員会は若干人の候補者を推薦することができる。

附則 本会則は2003年3月15日より実施する。

(8) 評議員選挙について

2002年10月に行われた評議員選挙では、同数得票者が出たため抽選で選出した。しかし、会則中役員等の選出に関する細則には、評議員選挙の同数得票者が出た場合の規定はない。そこで、下記細則の変更が必要になる。

< 現行 >

第4条 評議員は、会員の郵送投票により8名を選出し、選出された評議員により約4名の評議員を、得票数を参考に、分類群、地区の均整などを考慮して追加指名する。

< 変更案 >

第4条 評議員は、会員の郵送投票により8名を選出する。複数の候補者が同数票を獲得したため9名以上が選ばれた場合は、抽選により8名を選出する。選出された評議員により約4名の評議員を、得票数を参考に、分類群、地区の均整などを考慮して追加指名する。

附則 本会則は2003年3月15日より実施する。

(9) その他

国際シンポジウム (IAPT2004) 開催について

会費滞納について

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 遊川知久

日本植物分類学会第2回大会の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。関係各位の出席をお願いいたします。

日時： 3月14日(金曜) シンポジウム終了後(午後5時10分を予定)

会場： 未定(関係各位におって連絡します)

評議員会においては、総会における審議事項と同様の内容が審議されます。その他の審議事項についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員のいずれかにお伝え下さい。

2003年度野外研修会のお知らせ

庶務幹事 遊川知久

今年度の野外研修会は、徳島県立博物館の小川誠さんに世話人をお引き受け頂き、11月に徳島県で行います。予定している研修場所は那賀郡鷲敷町と海部郡日和佐町周辺で、ナカガワノギクやシオギクなどを観察することができます。詳細はニュースレター5月号でお知らせいたします。

2002年度事業報告(案)

(1) 集会等の開催

- ・関西地区講演会の開催
大阪市立自然史博物館(1月20日)、大阪市立大学文化交流センター(12月21日)
2回
- ・年次学術集会(日本植物分類学会第1回大会)の開催
国立科学博物館分館 新宿、3日間(3月15日~17日)
- ・野外研修会の開催
宮崎県中部・北部 9月27~29日 世話人:南谷忠志氏

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
英文誌: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica Vol.52(2), Vol.53 (1), (2) 3冊
和文誌: 日本植物分類学会誌 第2巻1号, 2号 2冊
- ・ニュースレターの発行 No. 4, 5, 6, 7 4冊

(3) 委員会活動

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・国際植物命名規約邦訳委員会

(4) 日本植物分類学会賞

- ・日本植物分類学会賞選考委員会による選考を経て第1回大会総会で表彰
受賞者:大橋広好氏、堀井雄治郎氏

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等との連絡:日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合、
日本分類学会連合(平成14年3月16日加盟決定)など
- ・IAPT2004準備委員会の活動
- ・コスモス植物学フォーラムの後援
- ・日本学術会議の在り方についてのパブリックコメント

(6) その他

- ・バックナンバーの販売
- ・植物分類学関連情報(学術集会、研究動向、出版物、公募)を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換
- ・植物分類学マニュアルの編集・刊行(継続)

2003年度事業計画(案)

(1) 集会等の開催

- ・講演会 1回
- ・年次学術集会(日本植物分類学会第2回大会:神戸大学(3月14-16日))の開催
- ・野外研修会の開催(徳島県で11月に予定)

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
英文誌: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica Vol. 54 (1), (2) 2冊
和文誌: 日本植物分類学会誌 第3巻1号, 2号 2冊
- ・ニューズレターの発行 No.8, 9, 10, 11 4冊
- ・国際植物命名規約(St. Louis Code)の邦訳版

(3) 委員会活動

- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・植物データベース専門委員会
- ・国際植物命名規約邦訳委員会

(4) 日本植物分類学会賞

- ・日本植物分類学会賞の選考と授与

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・学会連合等との連絡: 日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合、日本分類学会連合など
- ・IAPT2004準備委員会の活動

(6) その他

- ・バックナンバーの販売
- ・植物分類学関連情報(学術集会、研究動向、出版物、公募)を収集し、ニューズレター、ホームページ等で提供
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換
- ・植物分類学マニュアルの編集・刊行

< 参考資料 >

会員数(人)(2003.1.4現在)	男性	女性	計
国内一般会員	687	88	775
学生会員	49	23	72
海外個人会員	7	1	8
名誉会員	13	2	15
計	756人	114人	870人

2002年会費未納者(2003.1.4現在)

一般会員	226人	学生会員	29人
(2001年度)	一般会員 101人	学生会員	12人)

2002年度決算報告(案)

通常会計		単価	員数	2002年度予算	2002年度決算	予算との差異	
収入 会費							
	一般会員	5,000	740	3,700,000	3,617,360	82,640	
	学生会員	3,000	70	210,000	173,000	37,000	
	団体会員	8,000	40	320,000	237,500	82,500	
	別刷り (APG)	180,000	3	540,000	411,680	128,320	
	別刷り (分類)	40,000	2	80,000	81,700	1,700	
	バックナンバー販売			50,000	518,070	468,070	注1
	利息			0	422	422	
	雑収入			50,000	400,587	350,587	注2
小計				4,950,000	5,440,319	490,319	
繰越金				5,762,974	5,762,974	0	
合計				10,712,974	11,203,293	490,319	
支出 印刷費							
	APG (52(2); 53(1,2)) 印刷費	1,000,000	3	3,000,000	2,663,281	336,719	
	別刷り・カラー印刷費	180,000	3	540,000	324,240	215,760	
	和文誌印刷費 (2(1), 2(2))	500,000	2	1,000,000	803,250	196,750	
	和文誌別刷り印刷代	150,000	2	300,000	17,346	282,654	
	NL 注3 印刷費	60,000	4	240,000	351,313	111,313	注4
	封筒等印刷費			150,000	57,136	92,864	
送料・通信費							
	APG 送料	110	3,000	330,000	236,931	93,069	
	和文誌送料	120	2,000	240,000	378,408	138,408	注5
	NL 送料	110	3,000	330,000	272,175	57,825	注5
	その他小包など			200,000	88,928	111,072	
事務費							
	消耗品費			50,000	949	49,051	
	アルバイト賃金			180,000	138,259	41,741	
	自然史学会連合負担金			20,000	20,000	0	
	総会費			0	0	0	
	学会賞賞金・表彰	30,000	2	60,000	60,000	0	
	会場補助費			100,000	100,000	0	
	会議費			130,000	2,800	127,200	
	編集費			180,000	390,439	210,439	注6
	手数料・その他			30,000	6,525	23,475	
	自動振替口座確認手数料	100	800	80,000	25,830	54,170	
	予備費			200,000	84,193	115,807	
小計				7,360,000	6,022,003	1,337,997	
次年度への繰越				3,352,974	5,181,290	1,828,316	
合計				10,712,974	11,203,293	490,319	
特別会計				予算	決算		
収入							
	前年度繰越金			1,887,343	1,887,343		
	利息			180	136		
合計				1,887,523	1,887,479		
支出							
	次年度への繰越金			1,887,523	1,887,479		
合計				1,887,523	1,887,479		

注1. 今年度は書店を通してのバックナンバー販売収入が多かったため。

注2. 主な収入は第1回大会からの寄付金21万、里見先生ご遺族からの寄付金10万、APGの著作権料5.5万。

注3. 表中、「日本植物分類学会ニュースレター」はNLと略記した。

注4. NLの印刷ページ数増による。

注5. NLと和文誌の同時発送を行ったため生じた差異。送料合計による差額はNLページ数増による送料増。

注6. 2001年度、2002年度分編集費をあわせて2002年度に支払ったため。

2003年度予算(案)

通常会計		単価	員数	2003年度予算	前年度予算との差異
収入 会費					
	一般会員	5,000	780	3,900,000	200,000
	学生会員	3,000	72	216,000	6,000
	団体会員	8,000	37	296,000	-24,000
	別刷り (A P G)	180,000	3	540,000	0
	別刷り (和文誌)	40,000	2	80,000	80,000
	バックナンバー販売			100,000	50,000
	利息			80	80
	雑収入			50,000	0
小計				5,182,080	232,080
繰越金				5,181,290	-581,684
合計				10,363,370	-349,604
支出 印刷費					
	APG (54(1) ,54(2)) 印刷費	1,000,000	2	2,000,000	-1,000,000
	APG 別刷り・カラー印刷費	180,000	2	360,000	-180,000
	和文誌印刷費 (3(1) , 3(2))	450,000	2	900,000	-100,000
	和文誌別刷り代	50,000	2	100,000	-200,000
	NL 印刷費	80,000	4	320,000	80,000
	封筒等印刷費			200,000	50,000
送料・通信費					
	APG 送料	110	2,000	220,000	-110,000
	和文誌送料	145 注1	2,000	290,000	50,000
	NL 送料	110	2,000	220,000	-110,000
	その他小包など			200,000	0
事務費					
	消耗品費			50,000	0
	アルバイト賃金 (含発送代行)			180,000	0
	自然史学会連合負担金			20,000	0
	総会費			0	0
	学会賞賛金・表彰	30,000	2	60,000	0
	大会補助費			100,000	0
	会議費			130,000	0
	編集費			180,000	0
	手数料・その他			30,000	0
	自動振替口座確認手数料	100	100	10,000	-70,000
	予備費			200,000	0
	関西地区講演会補助費			30,000	30,000
小計				5,800,000	-1,560,000
次年度への繰越				4,563,370	1,210,396
合計				10,363,370	-349,604
特別会計					
収入 前年度繰越金				1,887,479	
利息				180	
合計				1,887,659	
支出 次年度への繰越金				1,887,659	
合計				1,887,659	

注1. 和文誌とNL2回を同時発送する場合の送料見積もり。

日本植物分類学会第二回大会公開シンポジウムのお知らせ

日本植物分類学会第二回大会準備委員会

公開シンポジウムを以下のように開催いたします。参加費は無料です。

【日時】3月14日(金) 14時から17時まで

【会場】神戸大学 百年記念館

【テーマ】海・川と植物の進化 - 障壁または回廊としての役割 -

【プログラム】

- 14:00-14:10 公開シンポジウム開催にあたって
- 14:10-14:40 塚谷 裕一 (基礎生物学研究所 統合バイオサイエンスセンター)
「水環境および島嶼環境への葉の適応形態」
- 14:40-15:10 梶田 忠 (東京大学大学院 附属植物園)
「海洋における種子散布」
- 15:10-15:40 田中 法生 (国立科学博物館 筑波実験植物園)
「海草の遺伝子交流と分布の拡散」
- 15:40-16:10 Jeanine Olsen ジェニン・オルセン (オランダ・フローニンゲン大学)
Caulerpa taxifolia: the seaweed that changed the world
「緑藻イチズタ：世界を変えた海藻」
- 16:10-16:40 Wytze Stam ヴィツェ・シュタム (オランダ・フローニンゲン大学)
How fucoid seaweeds survived the last ice age
「褐藻ヒバマタ類はどのように最終氷河期を生き抜いたか」
- 16:40-17:00 総合討論

会費納入と自動振替利用のお願い

会計幹事 横山 潤

本学会の会費は前納制で、一般会員5,000円、学生会員3,000円、団体会員8,000円です。納入状況はニュースレター送付の際の宛名書きの右下に「納済会費：数字」という形で示してあります(2002年度から自動振替制度をご利用の方は、数字の代わりに「自動振替」と記入されています)。この数字が2003未済の方は、以下の郵便振替口座にお早めに納入いただきますよう、よろしくお願い致します。

口座番号：00120 - 9 - 41247

名 義：日本植物分類学会

ご承知のように昨年度より会費納入に自動振替をご利用頂けるようになっております。会計事務削減のため、なるべく本制度をご利用頂きますよう、よろしくお願い致します。ご希望の方は、自動振替依頼書にご記入・ご捺印の上、随時会計幹事にお送り下さい(ただし2003年度の会費引き落とし手続きは終了しておりますので、ご利用は2004年度からになります)。依頼書をご希望の方は会計幹事までお問い合わせ下さい。

その他、会費納入に関するご質問、納入状況のご照会など、随時承っておりますので、お気軽にお知らせ下さい。会計幹事の連絡先は、ニュースレター巻末をご参照下さい。

金沢大学理学部標本庫 (KANA) 移転のお知らせ

金沢大学 植田邦彦

金沢大学理学部生物学科は近く同じ角間キャンパス内ではありますが、第二期移転用地に建築中の建物に移転を予定しております。これに伴い現在生物学科に隣接して設けられている植物自然史研究室管理下の標本庫(KANA)も学科移転の1年後に移転が予定されております。このため来年度(本年の4月)より徐々に学科の移転に合わせて標本の移転準備を始めます。このため2003年度は徐々に標本が見られなくなっていく予定です。2004年度から5年度にかけては全標本の閲覧をお断りせざるを得ない状況となります。引っ越し完了後は可能な限り早急に再開できるように努力いたしますが、数年間はご不便をおかけすることになります。ご理解をお願いいたします。

教官 (助教授) の公募について

千葉大学 綿野泰行

千葉大学理学部生物学科では、以下の要領で多様性生物学講座 (系統学研究分野) の助教授を公募します。研究領域は、植物を対象とする進化生物学で、植物の系統分類学に幅広い知識を有し、分子レベルの研究手法を駆使できる方を望みます。大学院自然科学研究科における教育と研究指導もおこなっていただきます。

応募資格：博士の学位を有し、40才くらいまでの方

着任時期：平成15年10月1日予定

提出書類：各1部

- (1) 履歴書
- (2) 研究業績リスト (査読付原著論文、著書、その他に分類して作成し、分類別に通し番号を付けて下さい。学会などの講演要旨は含めないで下さい。)
- (3) 主要論文別刷 (10編以内、研究業績リストに)
- (4) 現在までの研究の概要 (A4用紙1~2枚)
- (5) 今後の研究・教育に対する抱負 (A4用紙1~2枚)
- (6) 過去5年間に応募者が中心となって受領した研究費
- (7) 本人に関し参考意見を求め得る方2名の氏名および連絡先

応募締切：平成15年4月15日 (火) 必着

提出書類は原則としてお返しできません。応募書類は封筒に「教官応募書類」と朱書し、(簡易) 書留にてお送り下さい。なお、選考の過程で応募者にセミナーを行なっていただく場合があります。

書類送付先・問合わせ先：

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学理学部生物学科 土谷岳令

TEL: 043-290-2816 E-MAIL: tsuchiya@bio.s.chiba-u.ac.jp

参考：千葉大学理学部生物学科の構成員等についてはWebページ

(<http://bio1.s.chiba-u.ac.jp/bio/>) を参照下さい。

連絡員からときどき便り 1

連絡員が交代しました。前連絡員の方、お疲れさまでした。新しい方はなんと8名です。山下さん、米倉さん、三島さん、落合さんにはアジアの植物について書いていただきます(2004年のIAPTシンポジウムではアジアの植物がテーマになる予定ですので、アジア気分を盛り上げようというわけです)。大村さん、石田さん、松本さん、古木さんにはそれぞれ地衣、藻類、シダ、コケについて書いていただきます。各員年一回、「ときどき」の登場になります。お楽しみに。

・・・と書いて早速ですが、なんと、前連絡員の河原さんが間違っで冬便りを送っていただきました！こういう間違いは大歓迎です。また、山下さんは書くことがありすぎて予定字数をオーバー！熱意を買って、次号と2回に分けてお送りします。

北方草木便り・4・

森林総合研究所北海道支所 河原孝行

なまらうまいっしょ！山の幸

私のいる羊ヶ丘の研究所(森林総合研究所北海道支所)は札幌の中心部からも車なら30分足らずで足の便はよいにもかかわらず、裏には60ha程の実験林(通称、裏山)が続いていてキツネ・エゾリス・ユキウサギ・エゾライチョウなどが常連で、エゾシカなどもたまに出没する。森林は90年ほど前の山火事再生林で過熟したシラカンバが多く、ミズナラ・シナノキ・イタヤカエデなども多く混じり、エゾサンショウウオや今や絶滅危惧種のニホンザリガニも見られる。また、トドマツやカラマツなどの造林用樹種による人工林も半分くらいの面積を占めており、景観上の多様性を与えている。どさんこは本当に山菜取りが好きで、利便性も手伝ってか、ここ羊ヶ丘には多数の山菜取りが訪れる。一応、研究目的の森林なので林道・歩道以外は立入禁止！と看板には書いてあるのだが、ほとんど気に留められておらず、5月終わりのタケノコのシーズンには朝も薄暗い3時頃からごそごそと笹藪をかき分ける熱心さである(すわ、クマかと何度驚いたことか!)。ちなみに、私自身は鳥の調査をするのに早く起きているのであって、山菜取りはあくまでも2次的なものである。羊ヶ丘で採れる山菜は

ネマガリ(チシマザサ、写真1の若いシュート): 5月下旬、刺身、天ぷら、みそ汁の具、水煮など。

アズキナ(ユキザサ、写真2): 5月中下旬、軽くゆでておひたし、煮るときに小豆に似た匂いがするのでこの名がある。

コゴミ(クサソテツ): 4月下旬 - 5月上旬、ゆでておひたし、天ぷら、まだワラビ巻き状態のものをを用いる。

タランボ(タラノキ): 5月下旬、若芽を天ぷら、炒め物。

ウド(写真3): 5月下旬 - 6月上旬、若い茎の皮をはいで酢味噌あえ、天ぷら、炒め物。

アキタブキ: 5月下旬 - 5月下旬、葉柄を水煮に。葉柄に赤みがあるのをアカブキ、葉柄に青みのあるのをアオブキ、と呼んで、アオブキが柔らかくて美味しいと好まれる。フキノトウも採れるが、北海道のはえぐみが強く人気がない。



写真1. 4m近くにもなる北海道のチシマザサ。この根元にネマガリが！

他に、ワラビ、ヤマブドウ（若葉を天ぷらに、酸味があって爽快）、エゾウコギ（天ぷら）、ヨブスマソウ（おひたし）、シャクなどが春の旬の山菜だ。実験林内ではとれないが、すぐ近くにはギョウジャニンニクも珍しくない。これは餃子でも炒め物でも鍋の具でも何でも使える。私達の研究グループでは毎年6月のはじめの頃、「山の神」と称し、山の神様に作業の安全と研究の成功を祈ってこれらの山菜を料理してお神酒を供奉、パーティを催している。まあ、実際は飲んで、食べて、騒ぎたいだけだが・・・

夏は実験林では取れるものがヤマグワの実ぐらいだが、道東などではコケモモやガンコウランなどいわゆる高山植物の実が海岸で採れてジャムにできる。ハマナスの花弁も受粉の終わった夕方に採集にいき、ジャムにするととても香りのよい逸品ができる。

秋には、ヤマブドウ、コクワ（サルナシ）、マタタビと実ものがいっぱい採れる。ヤマブドウはブドウジュースやブドウ酒をつくって村おこしをしているところもある。私がよく作るのはチョウセンゴミシの果実酒。ご存じのように、滋養強壮・強精・せき・たんに効果があり、韓国の済州島では特産品としてよく売っていた。また、秋は、きのこのシーズンでもある。北海道だけのきのこ図鑑が何冊もでるほど道産子はきのこ狩りが好きである。北海道で人気のあるのは、ラクヨウ（ハナイグチ、表面にぬめりがあってカラマツの落葉がよくつくのでこの名がある）、ボリボリ（ナラタケ、歯ごたえに由来）の2種類で、実験林内でも採れる。ボリボリには早生、中生、晩生の3種類があって形態的にも味にも違いがあり、分類学上の検討が必要とのことだ。ほかに、クリタケ、ヌメリスギタケモドキ、エノキタケなどいろいろ採れる。また、タマゴタケは子供がよく見つけてきて食卓に一品花を添える。

東京にいた頃にはほとんど楽しむ機会がなかった山菜採りだが、北海道にきてこんなに身近に楽しめて本当に嬉しい。しかし、最近では北海道でもごっそり取る人が増えて資源が減少しているようである。特に、タラノキは、他人に取られないように芽吹く前から主軸ごと切って自宅で水ざしして芽を吹かせるようなことをしているようである。これでは資源は減って行くばかりである。研究のためにも舌のためにも持続的な保全と活用を考えて行かなくてはいけない。そしていつまでも言い続けたい「なまらうまいっしょ！」



写真3 ウド。去年の枯れた茎あとを探すと、土から少し顔をだした美味しそうな新茎が見つかる。



写真2. アズキナ(ユキザサ)。花の咲く前のものを食べる

チイ便り・1・

国立環境研究所・学振 大村嘉人

他の連絡員の方に倣って・・・という訳でもないが、タイトルの分類群名をカタカナで書いてみた。「チイ＝地衣」である。不思議なもので苔や羊歯をコケ・シダと書くと全く違和感がないのに、地衣をチイと書くと何とも奇妙な感じがする。このように感じるのは何故なのか？

地衣は菌が藻と共生して一つの体を作っている複合生物であることはご周知のことであろう。最近の論文では地衣のことを「地衣化菌」と呼ぶことも日常的になってきている通り、地衣はまぎれもなく菌類の仲間なのである^(注)。しかし、木などに生える蘚苔類や地衣類、藻類をひっくるめて「木毛(コケ)」と呼んでいたという経緯から、地衣類は一部の種を除いて伝統的に「コケ」と呼ばれてきた(例：ウメノキゴケ、カラタチゴケなど)。学術的には生物の和名をカタカナで表記するのが原則であるが、そのような事情に加えて音韻の響きの悪さのために、これまで地衣が「チイ」のように表されることは皆無であった。このことが地衣をチイと書くと違和感を覚える原因なのである。

しかしこのような状況ではいつまで経っても「地衣はコケなのですか？」という一般社会からの誤解を解くことはできない。現状を打破するためには、誰かが「チイ」という和名を与えなければならないのである。日本の地衣学者はそのような葛藤を多かれ少なかれ持っていたに違いない。そして、ついに2002年の暮れに歴史的な1ページが刻まれた。黒川道博士および柏谷博之博士によって「オヤユビチイ」(写真)や「マンナチイ」と言った地衣の和名が誕生したのである(黒川&柏谷2002)。今のところまだ外国産の地衣にしかこのような和名は与えられていないが、今回の出来事をきっかけに今後国内産の地衣に対しても「チイ」の名前がお目見えする日もそう遠くはないであろう。



オヤユビチイ．撮影：阿部渉氏（北海道大学大学院）

注) 従来、地衣は様々な菌の分類群から多系統的に生じたと考えられてきたが、最近では、むしろ地衣は考えられているよりもずっと昔に進化し、菌類の主な系統の多くは、かつては地衣類だったが後に独立して非地衣化菌になったとする考えもある (Lutzoni et al. 2001)。

引用文献

Lutzoni, F., Pagel, M. & Reeb V. 2001. Major fungal lineages are derived from lichen symbiotic ancestors. *Nature* 411: 937-940.

黒川道・柏谷博之. 2002. 外国産地衣の和名について. *ライケン* 13(2): 1-8.

地衣類研究会ホームページのご案内

地衣類研究会は、地衣類研究の発展と普及をはかり、あわせて会員相互の親しみをますことを目的として1972年に設立されました。主な活動として、年1回の大会(総会および観察会)、会報「ライケン」の発行を行っている他、各種書籍の販売、地衣類研究上の情報交換など積極的な活動を展開しています。本会のホームページにはそれらの活動紹介だけでなく、地衣類に関する研究やトピックスの紹介、そして会員から寄せられた自慢の写真を掲載して人気投票を行うなどユニークなページとなっています。人気投票および写真へのコメントはどなたでも自由に投稿できます。是非ご覧下さい!

地衣類研究会ホームページアドレス: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/lichen/>

ホームページに関する問い合わせ先: 竹下俊治(広島大学) stakesh@hiroshima-u.ac.jp

・瓦屋山調査行・

大阪市立大学 山下純

1999年6月、中国科学院成都生物研究所のPu Fa-ding、Wang Ping-li両先生、瓦屋山国家森林公园のLiu Chao-lu先生、大阪市立大学大学院理学研究科附属植物園の田村実先生とともに中国四川省瓦屋山の植物を調査する機会を得た。私には初めての中国訪問であった。ここにその模様を簡単ながら紹介したい。瓦屋山は、成都の南西約200 km、峨眉山の西に位置する。峨眉山に比べ知名度こそ低いが、特異な景観と豊かな自然環境に恵まれた名山である。当時、私は田村実先生のもとで、後期博士課程の3年生であった。

四川省の空気は印象深かった。常に水蒸気が満ち、人肌に触れるような温みがあった。遠景は霞に溶け、墨色の濃淡で描いたようであった。「蜀犬、日に吠ゆ」という言葉がある。四川の犬は太陽を見て吠える、それほど曇りの日が多いという意味だが、今回の調査行で、まぶしい陽射しを感じたことは一度も無かった。季節から言って当然だったのかもしれないが、「四川省らしさ」に触れられたように思った。

成都から車で一日、瓦屋山への拠点となる町、柳江に着いた。瓦屋山へはここからさらに車で一日の行程である。宿の塀の上にはオオクリハランが群生する。部屋は三階で眺めは良い。古い町並みが夕闇に沈んでいく。カザリシダをごく小さくした様なものが軒先で雨に濡れていた。

瓦屋山は標高2830 m、山頂部は15000ヘクタールに及ぶ広大な台地をなす。いわゆるテーブルマウンテンである。台地の上はモミ属の*Abies fabri*の高木を主体とし、ツガ属の*Tsuga yunnanensis*、カバノキ属、カエデ属を伴う森林が広がる。この天上の楽園を護る



瓦屋山の北東面

かのように、落差数百mにも達する断崖が台地を取り巻く。山上を巡ってきた幾筋もの溪流が、数多の長瀑となって懸かる。

山上で二泊し、私は初めて見る中国の植物を堪能した。シャクナゲの類が非常に多く、針葉樹林内で低木層を成している箇所もある。ちょっと見ただけでも *Rhododendron jindingensis* を含め、4種類はある。断崖上の開けた場所には開花個体が多く、断崖の懸瀑とともに山水画のような景観を作っていた。

山頂の林内は、苔生した針葉樹の幹にミヤマウラボシに似た *Phymatopteris shensiensis* が群生する。同じような樹幹に *Heteropolygonatum* が着生していた。*Heteropolygonatum* は最近、田村実、荻巣樹徳両先生によって記載された属で、中国西南部に今までのところ5種が知られている。全てが着生種である。アマドコロ属に似ているが、花序が葉腋のほか茎

頂にも着く。瓦屋山には2種が生育し、*H. xui* は5cm程度の楕円形の葉を1枚だけつける2倍体種で、可愛らしいものである。もう一種は数枚の長楕円形の葉をつける4倍体種で、*H. ogisui* という。*H. xui* はそこかしこの樹幹に群生するのが望見できた。大抵おいそれと手が届かぬところにある。*H. ogisui* のほうは台地の北縁に集中し、樹幹の幾分低い箇所に生えていた。林床植物ではパンダの好物で知られる *Sinonanditaria* が多く、ほかにスギカズラ、ヘビノネゴザ近似種、オシダ属の *Dryopteris* cf. *komarovii*、キヨスミヒメワラビ属の *Ctenitis zayuensis* 近似種、オニゼンマイ(湿原)、ミヤマウラボシ、アマドコロ属の *Polygonatum cirrhifolium*、ユキザサ属の *Smilacina tubifera*、ソクシンラン属の *Aletris glabra*、ギョウジャニンニク近似種、ツクバネソウ属など、着生植物ではノキシノブ属の *Lepisorus pseudonudus*、スギランに似た *Huperzia* cf. *emeiensis*、コケシノブ科の *Mecodium corrugatum*、サルオガセ属などが見られた。

(次号につづく)

*Heteropolygonatum xui*

編集後記

すみません、今年度も相変わらず、編集を担当させていただきます。代わり映えせん、と怒らないでくださいね。新鮮味に欠ける編集を救って下さるのは、楽しい原稿しかありません。今回は、委員会報告にも笑いを織り込んで下さった某委員長、慣性の法則？で思わず原稿を下さった某連絡員、熱意のあまり字数大幅オーバーの某連絡員など、思わぬ楽しい原稿をいただきました。みなさんも、どうぞ素敵な原稿をたくさんお寄せ下さい。とくに、ご自慢の採集道具・採集方法をどうぞお教え下さい。さあ、もう2年間、おつきあいよろしくおねがいします！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学博物館
西田佐知子

電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5896

Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読申込などは下記へご連絡ください。

〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉
東北大学大学院生命科学研究科生態システム生命
科学専攻

日本植物分類学会 横山潤（会計幹事）

Phone:/Fax: 022-217-6689

E-mail: jyokoyam@mail.cc.tohoku.ac.jp

会費：一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、

団体会員 8,000 円

郵便振替 00120-9-41247

平成 15 (2003) 年 2 月 17 日印刷

平成 15 (2003) 年 2 月 24 日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町

発行人 名古屋大学博物館

西田佐知子

発行所 つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館筑波実験植物園

日本植物分類学会